



「靴は一週間に一べんだけ履いてあとは休ませてやるのが長持ちの秘訣。贅沢やけど、ほんまは靴のためにはそれが一番なんです」

●メンズ・レディースとも1足 6万円～  
●修理は1万5000円～  
※注文してから約1カ月半が必要

若い頃から店の工房に出入りしていた福島さんは、職人さんたちの仕事を見聞きして靴づくりを覚えていったそう。

「何が難しい言うて、靴づくりの難しさは、道具の多さやと思う。まず道具の使い方から覚えなあかんからね」。

24歳頃から自分の靴をつくりはじめ、かれこれ30年。福島さんが何よりうれしいのは、出来上がった靴をお客さんが履いて「うわっ、ものすごく履きやすいわ」と喜んでくれる時に尽きるという。

「けど靴づくりに終わりはないなあ。なんぼやっても100%ということはない。やればやるほど自分の目も肥えてくるし、もつとええものつくろう、つくつてやろうとなつてくるねん」。

福島さんは仕事を離れて、街を歩く時でも、つい歩いている人の靴を観察してしまったり。「今、どんな靴が履かれているか、雑誌を見るより、街歩きした方が実



(右) 店には使い込んだストーブが一年中燃えている。福島さんがゴム底を火にあてて柔らかくしたり、コテをあぶったりするために火が欠かせないのだ。「暑い夏に何ストーブ燃やしてんねんとよくお客さんにいわれるけどな。こればっかりは消されへんわ(笑)」。

(左) お祖父さんの時代は、学校の制靴など大口の注文が増え、特にスケート靴で有名になり「スケート靴のコバヤシ」と言われるほどだったという。店先には当時の名残のアイスホッケーのスティックとパックが残っている。



06・6311・7368 大阪市  
北区曽根崎2-10-29 11:00  
～20:30、日曜・祝日12:00～17:  
00 第3日曜 日なし 阪急  
梅田駅2・3階改札口より徒歩  
7分



感できる。あとなあ、雑誌でよく靴のケアとかいうて、シューキーパーを使うとか出てくるやろ。あれも靴をぎゅつと伸ばしきつて使たらあかんねん。かかとの方にちよつとゆとりを持たせて使わな、靴がすぐ傷んでしまうよ」。

淡々と語る福島さんの言葉には、靴へのあくなき探究心と限りない愛情が溢れている。職人の厳しい目と手で作られた靴を履く時は、背中をしゃんと伸ばし、軽快に歩きたいものである。

### 終わりのない靴づくりの仕事。お客さんの笑顔が何より力強い支えとなる

「靴 コバヤシ」は福島さんで4代目となる、創業1921年の老舗である。

京都から大阪に出てきた福島さんの祖父が丁稚奉公をしたのが「小林靴店」だった。その後、祖父が独立し、コバヤシの名を掲げて店を開いた。職人を何人も雇い、かなり手広く商売をしていたが、震災のため一時閉店。その後、福島さんの父が新たに曾根崎に店を開いた。父の死後、兄が一時継ぎ、29歳の時、福島さんが店を継ぐことになった。



福島さんが使う道具は、包丁だけでも2～3種類、ワニ、目付、すくい針、縫い針、ドブカキ、ボン台…と一度では覚えきれないほどの数がある。東急ハンズなどに出かけて、さまざまな道具を見るのが休日の楽しみだとか。道具好きは職人の宿命なのかもしれない。



しわがきれいに取れたら、すくい針と縫い針を使って、甲革と中底と靴の縁を重ねて縫い合わせていく。その後、本底を張りつけ、出し縫い屋と呼ばれる専門のところで本底を縫ってもらい、最後に福島さんが靴底の縁を研磨し、ロウを塗って仕上げる。たかが靴と言わなけれ。手づくりの靴というのは、たった一足を仕上げるのに、これだけの手と時間がかかるものなのだ。

こうして出来上がった靴は、手にとると

### 大人ならばいつかは履きこなしてみたい。手づくり靴の真骨頂

ずつしり重い。しかし一度足を通すと、まとわりつくようにぴったりフィットして、すつと軽くなってしまう。

「靴はサイズで履くもんじゃないというのがわかるやろ？ 甲の横から後ろがしっかりとくいつけば、必ず足にフィットするもんやねん」と福島さんが会心の笑みを浮かべる完璧なフィット感。大量生産の靴に比べると決して安くはないが、この靴だけしか履かないという常連客が多いのもうなずける。

大人ならば一度は履きたい靴、修理し続けてもずっと履きたい一足、まさにそんな靴なのである。



木型に張り合わせた中底に印をつけ、包丁で溝を彫っていく。甲革師から甲革本体があがってくると、腰玉を入れ、木型にかぶせる。ここから福島さんの本領発揮。つりこみ、すくいの作業に入る。ワニで革を引っ張り、小さな釘を打ち込みつりこみは、履き心地と形の美しさが表れる重要な作業。「これが一番使いやすい」という爪切りで釘を抜き、ワニで革をぎゅつと引っ張りしわを取る。これを丹念に繰り返した後、甲革と中底を重ね、すくい針と縫い針を使って縫い合わせていく。

